

## 令和4年度（2022年度）第2回えりも地域ゼニガタアザラシのモニタリング方法に係る作業部会からの報告

### ○開催状況

令和5年1月26日（木）9：00～12：00

### ○参加委員

松田裕之教授（横浜国立大学）、小林万里教授（東京農業大学）、北門利英教授（東京海洋大学）、三谷曜子教授（京都大学）、宮内泰介教授（北海道大学）、坪田敏男（北海道大学）、藤森康澄（北海道大学）、山村織生准教授（北海道大学）

### ○検討内容

#### （1）令和4年度漁獲情報等について

- ・サケ漁獲量は道内全体だと増加しているが、えりも地域では減少している。この理由について、海流の影響や稚魚放流時に生残率を下げる事象等があったと想定される。えりも地域は回帰する大きな河川がないので、海流の影響が強いのではないかと考えられる。
- ・令和4年度第1回科学委員会において、春定置におけるゼニガタアザラシの混獲頭数が非常に少なかった要因として、シャチの出没により出産時期が遅れた可能性があるとの報告したが、不確かな推測であったため報告を撤回する。

#### （2）大型個体の上陸個体数割合について

- ・近年、ゼニガタアザラシの大型個体に衛星発信機やワッペンを装着した行動圏調査を実施している。
- ・行動圏調査は、秋期に個体を確保して放獣してから、ドローンが飛ばせない冬期を除き、春期の換毛によりワッペンが脱落するまでを調査期間とする。
- ・大型個体は多数確保することが困難であるため、追跡個体数は年2頭程度を目標とする。数年間データを蓄積して上陸個体数割合を算出する。

#### （3）ステージベースモデルについて

- ・ゼニガタアザラシの個体群動態を予測として、現在はゼニガタアザラシの齢構成モデルを利用している。齢構成モデルでは、捕獲・混獲個体の年齢情報の利用を理想とするが、今後の年齢査定負担軽減を目的として、本年度は年齢査定の省力化を見込めるステージベースモデルを試行的に作成した。
- ・試行したステージベースモデルでは、雌雄毎に当歳、1歳以上の未成獣、成獣の3ステージを設定した。齢構成モデルでは年齢的に成熟率情報が直接得られるためそれを利用することができたが、ステージベースモデルでは未成獣が成獣のステージに昇格する率（昇格率）を仮定するものの、未成熟ステージ内の齢構成が変わっても一定の値を仮定することになる（例えば、未成獣ステージ内で1歳が占める割合が高い場合と3歳が占める割合が高い場合では、昇格率が異なることを考慮する必要があるが、齢構成をモデル内で考えていないためそれを反映させることができないためである）。
- ・現状の解析では、ステージベースモデルと齢構成モデルの解析結果に大きな違いは見ら

れなかった。今後、齢構成モデルを継続して利用する場合、成長式を用いて年齢査定  
の負担を大きく軽減させる方法を、またステージベースモデルではモデルの拡張を、  
それぞれ検討することが課題となる。

(4) 個体群動態モデル全般について

- ・生息頭数を2016年3月時点の個体数比80%とする管理目標の達成に近づいているが、  
従来モデルには最新のモニタリング情報が組み込まれていないので不確実性が残る。
- ・混獲も詳細情報をモデルに組み込むことができるとよい。捕獲と混獲を合わせた捕獲枠  
設置を考えることができる。

(5) 中間評価の作成

- ・令和2年度から令和7年度を期間と定める「えりも地域ゼニガタアザラシ特定希少鳥獣  
管理計画（第2期）」から3年が経過したことから、中間評価を作成した。さらに、モ  
ニタリングに係る用語を整理した「用語集」を作成した。
- ・作成にあたっては、科学的知見に基づき、これまでの事業内容を総合的に分析・評価し  
ている。詳細内容は資料2-3で説明。
- ・今後モニタリングに関する変更が生じた際は、用語集を更新する。